



「ふるさと」を考える 外尾 悦郎 氏の講演から

校長 前田 倍成

「ふるさとをしっかりとっていれば、人は世界のどこにだって赴くことができるのです」

先日、聖家族贖罪教会（サグラダ・ファミリア）彫刻家 外尾 悦郎 氏が講演冒頭で話されたことばです。

外尾氏は、福岡市出身で、1978年にスペイン・バルセロナに渡り、アントニオ・ガウディが手がけたサグラダ・ファミリアの彫刻に携わります。彼の人生と作品の根底には「喜び」「感謝」「許し」という3つの重要なテーマが流れていると言われているそうです。現在では、その彫刻部門の総監督として活躍を続けられていることをご存じの方も多いのではないのでしょうか。

講演の中で外尾氏は、自分のふるさと福岡についてこう話されました。「土地柄ももちろんだけれども、やはり、うまい食べ物がたくさんあることが一番です。バルセロナで彫刻の仕事をするようになったけれども、バルセロナにはうまいものがたくさんありました。この食がなければバルセロナで彫刻に携わることはなかったかもしれません」

日本に生まれ、長年バルセロナで活躍する外尾氏にとっての「ふるさと」とは、生まれ育った場所や国籍といった物理的・固定的なものではないようです。精神的な安らぎがあり、自身の魂が帰るところ、創造の源泉となるところなどの内面的な拠り所となるものを

「ふるさと」の概念として捉えておられるのだと感じました。（…わたしの力不足でうまく表現できず、なんだか難しい話のようですが、実際の講演はよくわかる内容でした）

そして、外尾氏は、講演を聴くわたしたちにこう話されました。

「校長先生はじめ学校の先生方には、先生ご自身が子どもたちにとっての『ふるさと』になっていただきたい」…うーん、そうなるうと思ってそうなるものではありませんね。大変壮大な、そして永遠の宿題とも言えることだが、胸にずっしりときていました。

（第77回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会 外尾氏講演「志す」より）

志賀小学校の子どもたちは「ふるさと」をどう捉えているのでしょうか。この志賀町という土地自体や景観だけではないですよ。そこに存在する人、もの、ことが、一人一人の心を掴んで離さない精神的な拠り所として、心安まる場所として、「ふるさと」となっているとうれしいなあと考えます。そしていつか、その「ふるさと」を胸に、感謝を忘れず日本、いや世界で活躍してくれることを願います。

—— 受賞、おめでとうございます！ ——

【第41回石川県科学の夢絵画展】

銅 賞 2年生 谷内 陽菜乃

【第21回小学生の見た建設の絵】

金 賞 4年生 畑山 楓空介 銀 賞 3年生 平野 瑛大
銅 賞 2年生 山瑞 涼真

【未来へつむぐ家族の手紙】

優良賞 6年生 裏 ほたる 4年生 木村 歩
佳 作 6年生 辻口 理善



【第50回JA「ごはん・お米とわたし」作文コンクール】

石川県農業協同組合中央会賞 入選 3年生 藤澤 心仁奈

【第48回JAバンク石川くらしの絵コンクール】

JAバンク石川信連賞 金賞 1年生 桜井 里奈 銅賞 2年生 山口 智春

—— 保護者のみなさまへ ——

【11月25日（火）「災害時引き渡し訓練」を行います】

詳細についてはすでにマチコミ、紙媒体でお知らせいたしましたとおりです。

今回は学校周辺の交通混雑・渋滞をできるだけ避けられるよう、またスムーズな引き渡しが可能となるよう保護者駐車場に運動場を開放し、地区別の来校時間帯を設定いたします。また、案内にも記載してありますように、お子様を迎えに来られるおうちの方には、来校時の自動車進入経路にもご配慮いただけますよう、切にお願い申し上げます。